

平成 30 年度第 1 回あいち医療ツーリズム推進協議会 議事概要

日 時：平成 30 年 7 月 6 日（金）午後 3 時から午後 4 時まで

場 所：愛知県庁本庁舎 6 階 正庁

出席者：（委員）15 名（代理含む）

（事務局）保健医療局長、保健医療局次長、健康福祉部技監、
医務課長 他

傍聴者：1 名

1 挨拶（愛知県保健医療局 松本局長）

2 議題

(1) 平成 30 年度の医療ツーリズム推進に関する取組について

（愛知県医務課 兼子課長補佐）

- 資料 1 から資料 4 により、以下について説明
 - ① トップセミナー
 - ② 国際医療コーディネーター育成研修
 - ③ 医療機関向けアンケート
 - ④ 海外 P R

（会長 愛知県医師会 柵木会長）

- ただ今の説明について御意見はあるか。

（医療法人偕行会 川原理事長）

- 北京での展覧会について、医療機関ごとのブースで P R するのもよいが、過去にこの会議でもたびたび指摘されてきたように、やはり愛知県の名前が国際的に弱い。愛知県ではどのような医療を受けられるのかということ、一つの病院ごと、あるいは県全体の内容がわかる資料を作っておいてもらい、その上で各医療機関のブースでそれに対応するという形がよいのではないか。全

体を取り上げることは大変なので、特徴的なものを示して、愛知県に来るとこういう医療を受けられますよと説明して、愛知県をアピールして集客する方法が良いと思う。集客はなかなか難しいので、集客の方法の一環としてこのような方法を検討してもらえればと思う。

(会長 愛知県医師会 柵木会長)

- この展覧会には他県も出展しているのか。愛知県だけが合同で出展するのか。

(愛知県医務課 兼子課長補佐)

- 他県は出展しておらず、愛知県独自の取組である。

(会長 愛知県医師会 柵木会長)

- 日本の医療全体における愛知県の医療の特徴については、これまではPRしていないのか。

(愛知県医務課 兼子課長補佐)

- していない。先ほどの川原委員からの提案については、今後、展覧会への参加医療機関を募集する際に、愛知県の医療全体での取組としてどのようなことができるということを、個別に相談しながら対応していきたい。

(会長 愛知県医師会 柵木会長)

- このまま展覧会の会場で各医療機関が個々に対応するということになるのと、どのように愛知県の特徴を示すのかということ各医療機関で決めるのは、なかなか難しいと思う。

(愛知県医務課 兼子課長補佐)

- 資料4の3(2)に示しているPR資料としてDVDやチラシ等を作成して、愛知県の全体での取組等を紹介し、愛知県全体をPRしていきたいと考えている。

(医療法人偕行会 川原理事長)

- DVDやチラシで紹介するのはよいが、それだけで紹介しきれぬかな、とも思う。藤田保健衛生大学病院と偕行会のように単独でブースを出すという組織体制をとっている医療機関であればPRしていけるかもしれないが、そのような体制をとっていない医療機関はすぐ対応することは難しいだろう。

そういった医療機関も、相手にとっては魅力的ということはあるので、愛知県ではこういう医療を受けられるという県全体の案内をまず行って、そのような医療機関をくみ上げていってもらいたい。愛知県ではこういう医療を受けられるということを大きくアピールできれば、今後（展覧会に）参加するときに活かすことができるし、仮に今後参加できなかったとしても、愛知県の医療を中国の人たちに理解してもらうことができる。愛知県での医療の特徴を強くアピールして、東京や関西に対抗していかなければならない。

また、チラシの内容は抽象的なものにするのではなく、陽子線治療など具体的なものにするべき。こういった治療ができると具体的に示していくほうが、中国人にはアピールできるのかもしれない。

(会長 愛知県医師会 柵木会長)

- 愛知県からは何名参加するのか。

(愛知県医務課 兼子課長補佐)

- 県職員は1名である。

(国立長寿医療研究センター 荒井病院長)

- 県としてまとまって、県の医療をどのように展覧会でアピールするかということは大事。7～8月に行うアンケートの内容をどのようにまとめて、11月の展覧会に活かしていくのか。この地方であれば、例えば認知症の予防から早期診断といった内容や、ロボットによるがん治療やリハビリテーションなどがアピールできると思う。特に中国人は人間ドックに興味を持っている人が多く、

日本のクオリティは高いので、愛知県ではこういった特徴のある健診・診断や治療ができるのかということをしかりとリストアップし、アピールしてもらいたい。セントレアまで多くの病院が 30 分以内という高い利便性や、医療の特徴をあわせてPRしてもらえれば集客につながるのではないかと思う。また、個別の医療機関で言語対応するのは難しいので、県で通訳手配などのサポートをするのもよい。

(2) 訪日外国人患者の受入れ事例について

(中部メディカルトラベル協会 木村事務長)

- 資料「渡航を支援する企業の活用事例発表」により、4つの事例について説明

(会長 愛知県医師会 柵木会長)

- 最後の事例は特に手術はせず、15日間の検査と、ある程度のコントロールの治療を行ったということであるが、この場合の価格設定の方法と結果的にいくらぐらいになったのかということをお教えしてもらいたい。

(医療法人偕行会 川原理事長)

- まだ退院したばかりで清算は終わっていないが、おそらく数百万円請求することとなるだろう。通常の二倍で価格設定をしている。

インドネシア人男性の事例については、なぜ日本に来るのかと思われるかもしれないが、インドネシアでは国内病院が信用できないため、マレーシアやシンガポールで受診することが多い。しかし、マレーシアやシンガポールには一極集中しているため患者が多く、適当にあしらう。また、中国についても、中国人は香港の病院を受診することが多いが、香港の医者は本土のほうが高い給与水準であることなどから嫌気がさしており、こちらも適当にあしらうことが多い。そうすると、他国に出ることになるものの、既に一極集中している国には行きづらいので、日本のようなより良い条件のところへ行くことになる。今後、日本にも大勢押し寄せれば同じような状況になると思うが、現在はまだ件

数が少ないため丁寧に対応できており、好感度も高くなっている。

しかし、藤田保健衛生大学病院のように専門病棟があればよいが、一般の病院は保険診療用に建てられており、なかなかそのような対応はできないということに留意しなければならない。対象が富裕層なので、貧弱な施設で受け入れることはできない。藤田保健衛生大学病院の立派な個室のような療養環境の整備も重要である。また、外国人の受入れに当たっては食事も工夫する必要がある。

(名古屋大学医学部附属病院 石黒院長)

- 中国からの患者を受け入れた際、一番困ったのは言葉の問題であった。昼間は中国から留学で来ている大学院生にボランティアで対応してもらっているが、夜間にトラブルがあった。発表された事例では24時間体制の専用携帯電話を貸したとあるが、費用はいくらか。また、通常のサービスなのか。

(中部メディカルトラベル協会 木村事務長)

- 24時間体制の専用携帯電話は、この事例で患者と当協会の間に入ったコーディネーター業者では標準のサービスとなる。通訳をコーディネーター業者で用意する場合と病院側で用意する場合によって、費用の負担方法や額はまちまちである。

(医療法人偕行会 川原理事長)

- 昼間は通訳やコーディネーターがいるため問題ないが、夜間に問題が発生することは多い。偕行会では日本の看護師資格を持つ中国人スタッフを雇っている。ただ、そのスタッフの対応がぶっきらぼうでトラブルになったことがある。言葉ができるだけでなく、日本の医療に馴染む必要もある。他には、よく使う表現を予め書いておいて日本人スタッフが患者に見せる方法や、A i（人工知能）の活用も大事になってくる。

(会長 愛知県医師会 柵木会長)

- 2300万人の外国人が来日する中で、日本医師会では「外国人医療対策会議」を立ち上げた。医療ツーリズムとは別の視点で、外国人医療に関する費用負担や治療内容、言葉の問題を含めて議論する場で、オリンピックに向けて国家戦略の一環として設置された。医療ツーリズムにおける対応とは若干違うが、重なる部分もある。

(あいち健康の森健康科学総合センター 津下センター長)

- 日本人よりも患者層が若いと思われるが、医療ツーリズムに他より関心の強い世代はあるのか。また、議題(1)のアンケートで回答の選択肢にあった国は、どのように選ばれているのか。

(中部メディカルトラベル協会 木村事務長)

- これまでの事例では、年代的な偏りはない。

(愛知県医務課 兼子課長補佐)

- 選択肢の国は、昨年度のアンケートで実績のあった国を例示している。

(国立長寿医療研究センター 荒井病院長)

- インフォームドコンセントや人間ドックにも通訳の手配はあるのか。通訳の評価はどのように行うのか。

(中部メディカルトラベル協会 木村事務長)

- 中国人医師も対応しており、このレベルでないと問題になる。病院によっては自分で通訳を手配することが難しいという場合もあると思うので、その場合には協会ですべてフォローする。通訳者にもトップレベルから日常会話まで幅がある。当協会の会員には通訳会社もあり、紹介することもできる。